

東京成徳大学大学院心理学研究科

博士論文（要旨）

早産児家族への心理的ケアの探求

—当事者研究視点に基づく家族感情と支援方法の探索—

2024 年度

東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻

羽布津 碧

論文要旨

本論文では、早産児家族の抱く感情や、現状を明らかにするとともに、ファミリーセンタードケア（FCC）に基づいた多職種協働による、心理的ケアプログラムの開発方法および結果の提示を目的とした。これまで早産児家族の抱く感情自体が不明瞭であり、また、その支援も医療者主導で実施されてきた。そこで、本研究においては、当事者研究の考えを応用し、家族の抱く感情の実態を探るとともに、内面的な変化を促すプログラムの創造を目指した。

第5章では、早産児家族会が実施する家族交流会を観察し、「生の感情」、語られた「主題」を分類した。調査協力者は、「生の感情」を自分なりに捉え直した「現在の感情」を語っており、近しい立場の者同士でも気を遣う様子が伺われた。

第6章においては、在胎期間を4カテゴリーに分け、合計5名の父母に対し半構造化面接を実施し、家族感情をより詳細に把握することを目指した。特に児の入院中、母親は「自責」感情を募らせ、自分の役割を搾乳のみに見出していた。また、後期早産児の母親からは、家族会への忌避感や支援不足への不満が語られ、早産児家族の中でも比較が生じていた。さらに母親は、児の成長に安堵し、その感謝を周囲の支援者に向けていた。一方で、夫婦で調査協力者となった2名の比較から、夫婦間で早産児の親として話し合う難しさが浮き彫りになった。

第7章では、早産児家族のQOLを心的外傷後の成長（PTG）と操作的に定義し、全国的なアンケート調査によりQOLおよびQOLに影響を及ぼす要因を探求した。早産児家族のQOLは、慢性肺疾患（CLD）の有無や在胎期間の長短によっても有意な得点差は見られず、これまで家族

の QOL への影響が想定されてきた医学的な重症度や在胎期間よりも、それぞれの家族の受け止め方や、対処法が影響することが示唆された。

第 8 章から第 10 章は早産児家族に当事者研究の考え方に基づいた心理的ケアプログラムを応用する一連の研究であり、第 8 章では、FCC 実践の 1 形態として「当事者研究」プログラムの共同創造の過程を提示した。デモンストレーション実施前後の「当事者研究の専門家」および「新生児科医療の専門家」との協議を経て、完成した共同創造の過程を、プロセスレコード（日誌法）により明らかにし、完成した早産児家族のための「当事者研究」プログラムの内容を示した。

第 9 章では、早産児家族のための「当事者研究」プログラムをデモンストレーションとして 4 名の当事者である調査協力者に実施し、アンケート調査およびグループインタビューで評価するとともに、共同研究者との協議を経て、プログラムの社会的妥当性を含む、プロセス評価を行った。

第 10 章においては、プログラムの有効性検証を目的とし、全国から募集した調査協力者を介入群と待機群に分け、介入を試みたが、結果として、有意な差は認められなかった。今後、サンプル数を増やし、さらなる調査を行うことが求められよう。

以上から、本論文は、当事者研究の考えを新生児医療分野に取り入れ、家族主体の心理的ケアプログラムを構築し、その過程を明らかにした FCC の新たなアプローチであるといえる。